

歴史は繰り返さないが韻を踏む



福岡大学

森田 慶子

子どもの時に夢中になって読んだ本の中に「ノストラダムスの大予言」があった。いろいろな予言の中でも特に1999年7月に恐怖の大王が来るという内容の人類滅亡説に興味をそそられた。結局、2000年になるとコンピュータが誤動作すると騒がれたY2K問題でまとまったような気がする。しかし、日本語に翻訳された彼の予言は概ねフィクションであるという説や、年代には概ね±30年の誤差があるという解説も記憶に残ってる。そうすると新しい感染症の流行や現在のウクライナ情勢はもしかしたら彼の予言の前兆かもしれないと考えるとぞっとする。

2019年末からのCOVID-19の流行も、感染症の歴史を紐解いていくと世界的な流行がおきたのちに終息していく歴史を振り返ることができる。1918年のスペイン風邪と呼ばれたインフルエンザの流行から考えてもおおよそ40年ごとに新型インフルエンザの流行を繰り返している。記憶に新しいのは、2002年～2003年の重症急性呼吸器症候群（SARS）、2003年～2004年の中東呼吸器症候群（MERS）と高病原性鳥インフルエンザなどがある。これらは、理由は明らかになっていない様であるが、いつの間にか収束している。願わくは、第8波の流行を迎えることなくCOVID-19が収束することを切に願っている。感染症に限らず同じようなことは、人間の記憶が薄れ始めた頃に繰り返しているように思える。

何事もあとからいろいろな解釈を加えて行くことは案外簡単であるが、全てのことを正しく予測していくことは難しい。予測の精度を高めるために何が重要かと考えると、とにかく現状を把握することが大切ではないかと思う。協会には、久田嘉章先生を委員長とした災害時調査部会がある。地震発生後、免震建物や制振建物の調査を行う部会である。本年度、日本各地に委員を増員して配置し、迅速な調査を行え

るよう体制が強化された。所有者のものである建築物の調査は、地震後の調査協力が得られない場合もあるが、大部分が今後の為にと理解を示してくださっている。その他にも各種委員会において調査研究を行っている。今後も免震および制振についてよく知る私たちが現状を把握し、その性能を一般の方に分かりやすく示していく必要があるのではないかと考えている。

2022年3月16日に福島県沖で MJ7.4の地震が発生し、相馬市等で最大震度 6強を記録した。昨年2021年2月13日にも同レベルの地震がほぼ同じ領域で発生している。免震建物はこれらの地震においても十分な性能を発揮したことを確認している。その一方でエキスパンションカバーまわりの損傷も見受けられた。また、2年連続で地震後の調査にご協力いただいた建物の免震層で気になるものを見つけている。リスと考えられる齧歯類の排泄物とどんぐりなどの食料を集めた跡である。野生の動物は安全と考えられる場所に巣を作る。こういった調査の際だけでなく点検なども含めて免震層で野生動物に遭遇する場合もあるかもしれない。その際、不運にも攻撃された場合には何らかのウイルスに感染する可能性も否定できない。免震の効果だけでなく、このようなその他の情報も今後の為にぜひ共有しておきたいと考えている。

今年はいろいろな学会から「関東大震災から99年」というお知らせが届く。ということは、来年、関東大震災から100年、そして、日本免震構造協会は来年創立30周年の年を迎える。是非とも会員の皆様と一緒に知恵を集約して歴史を記録として残し、後世に伝えていきたい。おそらく歴史は繰り返さないが、同じようなことは韻を踏むように起きると思うからである。

記憶に残すのではなく記録に残していくのは大切だと思う。